



- 学長・副学長インタビュー
- 暮らしサイエンス
 - ・ストレス—情動創発の仕組みとその諸説
 - ・外反母趾と扁平足の意外な関係
- プロジェクト研究センター及び健康スポーツ学科の地域貢献活動の紹介
 - ・こころの健康支援研究センター設立について
 - ・総合型地域スポーツクラブと健康スポーツ学科の関わり
- 第7回 新潟医療福祉学会 学術集会の報告
- 学会交流セッション
 - ・子どもの発達と健康科学
 - ・健康長寿交流セッション
- 学外実習体験記
- 部活動紹介
 - 吹奏楽部・卓球部・バレーボール部・剣道部
- CAMPUS NEWS ● 伍桃祭を終えて
- 同窓会 ● 受験生のみなさんへ

10月6日(土)・7日(日)に本学大学祭である伍桃祭(ごとうさい)が行われました。両日ともに晴天に恵まれ、在学生だけでなく高校生や地域の方々にお越しいただき交流することのできた2日間でした。

本学における地域貢献の今後の展望

今年度から、本誌(QOLサポーター新潟)を北区のコミュニティセンターやスポーツ施設に置いて配布していただいています。そのことから、今回は「大学の地域貢献」をテーマに学長、副学長よりお話を伺いたいと思います。

学長 新潟市が政令指定都市となり、篠田市長からも地域活性化計画の一環として、本学の得意分野を活かした活動を行い、地域を活性化して欲しいという要望があがっ



学長、副学長へのインタビューの様子。進行は広報委員長 阿部薫先生

ています。また本学でも個々の教員が北区において「北区のまちづくり計画」の策定に携わる、「中高年スポーツ教室」を開催する、「認知症介護支援ネットワーク事業への協力」を行うといった様々な活動を行っています。

副学長 私も先日、市PTA連合会「北区PTA研究大会」が本学にて行われた際に、そこで「『家族と健康』～「食育」を中心として」と題した講演をさせていただきました。こういった教員が中心となって行う活動も地域貢献の1つではありますが、大学が位置する北区で生活する学生が、地元の方達と一緒に協力しあって地域のために活動したり、学生が主となる地域活動にも着目したいと思います。例えば、「阿賀野川ござれや花火」や「はまなす駅伝大会」といった地域で開催されるイベントに本学の学生が企画委員として参加し運営にも積極的に協力しています。

学長 大学としても、学生が行う地域活動については大いに評価していきたいですね。

副学長 学生が地域に溶け込み、地域に愛され、そして地域で活躍する、これは地域貢献の大きな目標の一つではないかと考えています。

学長 先日行われた新潟医療福祉学会の中で、市民の方にも多くご参加いただいた交

流セッションなどは、非常に有意義な活動であったのではないかと思います(※1)。

副学長 現在、格差社会を表す言葉の一つに「勝ち組」「負け組」といった言葉がありますが、地域が勝ち組となるためには、地域の中にある大学をいかに有効利用してその地域を活性化していくかといったことを積極的に考え実行する動きも出てきています。本学としても地域の方のニーズを把握した上で、その期待に応えることができる

かどうかといったところも今後の課題となってくるでしょう。

学長 おっしゃる通りですね。新潟市からも「開かれた大学」としての本学の在り方に期待しているといったご意見をいただいています。

例えば本学では今年度、健康栄養学科と木崎小学校との協働により、教員や保護者の方への食育講演や、北区に住む親子を対象とした料理教室を開催しました。こういった活動は一般の方が健康を維持するために望ましい「食生活」を形成するための学習の機会となり、地域住民のニーズを取り入れた地域と大学との「食育ネットワーク」を作るための活動として実施している地域貢献の一例です。

副学長 公民館で行う公開講座への協力や大学で行う講演会や各種教室の開催というのは、保健・医療・福祉の総合大学であるという本学の特質を活かして、今後定期的に行っていくことができるようになれば理想ですね。

学長 講演会や教室開催については北区にある本学だけではなく、より多くの方に参加していただくことを考えると、今年度より東京都千代田区丸の内開設した「東京キャンパス」などの活用も視野に入れることが考えられます。



新潟医療福祉大学
学長 高橋 榮明



新潟医療福祉大学
副学長 米林 喜男

副学長 東京キャンパスでは先日、首都圏在住のOBによる、同窓会の首都圏支部設立総会の立ち上げ会を行いました(※2)。この東京キャンパスで社会人を対象とした公開講座などを行うことで、新潟にある本学の情報を積極的に全国へ発信することも可能になりますね。

学長 現在本学は開学7年目となり、学生数も約2,000名となりました。少子高齢化という時代にあって、若い人がこれだけ多く1つの地域に集まるといことは、地域の活性や経済的な波及効果へとつながっていると思います。今後は本学が北区にあって良かったと地域の方から言ってもらえるよう、地域のニーズについてもご要望をお聞かせいただき、それを形にしていければ良いですね。

副学長 学生を大学とともに育ててくれているのが地域です。その地域に対して学生や教職員が良好な関係を保ちながら、人材を育成したり、ボランティアを行ったりといった還元を行うことができれば理想ですし、そうならないか悩まないと感じています。

学長 地域貢献には様々な形があり、地域社会に向けて大学側から発信するものや、地域から大学へのニーズがあって受けていくもの、そして双方が一体となって進めていかねばならないものがあります。また、大学側にも地域貢献を行うことで大学の教育研究の活性化を促すことができるというメリットがあります。

副学長 今後本学が地域と一緒に何ができるかといったことを模索していく必要がありますね。地域の方からのご意見を我々は出来る限り積極的に受け止めていきたいと考えています。

※1/新潟医療福祉学会及び交流セッションの様子については、本誌6・7ページに掲載されています。
※2/同窓会の首都圏支部設立総会の立ち上げ会については、本誌12ページに掲載されています。



ストレス—情動創発の仕組みとその諸説

作業療法学科
准教授 濱口豊太

日常の中で感じるストレスは、同じ内容であっても人によって認識の度合いやその時の状態によって変わってきます。現代社会に生きる上で、誰しもが多少は感じるストレスが起こる理由、そして歴史的な諸説を本学作業療法学科 准教授 濱口豊太先生より教えていただきました。

ストレスは工学と物理学の用語で物体にかかる圧力や圧力による物体の歪みとその応力を意味します。この物体を生体に置き換え、ハンス・セリエ（1907-1982）が唱えたストレスは、生体が外界から寒冷、外傷、疾病を受けたとき、あるいは生体が怒りや不安など強い情動を引き起こしたとき、一定の生体応答が生じることでした。

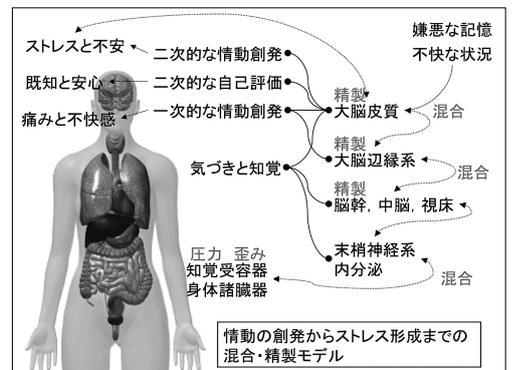
情動の中樞起源説で著名なウォルター・キャノン（1871-1948）は動物の緊急事態時に交感神経興奮が生じ副腎髄質から分泌されるアドレナリン動態と一致して心拍数増加・心拍出量増加・筋肉血管拡張・呼吸数増加・気管支拡張・筋収縮力増大・血糖値増加などのストレス応答を明らかにしました。

一方、ウィリアム・ジェームズ（1842-1910）は外界からの刺激を受けた生体受容器が最終的に心理反応を生じさせることから情動の末梢起源説を唱え「泣くから悲しい」という節が生まれました。スタンレー・シャクター（1922-1997）は大学生にアドレナリンを投与し生体反応を怒りと喜びの集団状況下で調べた結果、身体反応が同じでも感情共有した状況によって感情が異なることを明らかにし、情動は身体反応とその原因の認知の双方が創発する、情動の二要因説を提唱しました。

アントニオ・ダマシオらは、ヒトにアドレナリンを投与し不快な環境に曝したとき、アドレナリンの投与とその作用を知らされていない被験者は自らの動悸や冷や汗などの反応を環境のせいにして不

快感を顕わしたが、投与と作用を知らされた被験者はアドレナリンのせいだと判断し不快さも少なかったと報告しました。神経学者であるダマジオは、情動はヒトの大脳皮質が身体の反応と自らの体験とを照合して解釈し生成すると唱えています。体験した記憶を想起するだけで喜怒哀楽の情動が生じ、その時の脳機能も明らかにされています(Damasio R.A., Nature Neuroscience, 2000)。

ストレスは心理反応でもあり生体反応でもあり、現在検証されている情動の生体回路には身体と心理の複雑な機構があります。人生で強い情動体験が生体に記憶として刻まれると、それと関連した外界からの刺激や記憶の想起によって増幅された情動のうち嫌悪なものとなるのでしょ



外反母趾と扁平足の意外な関係

義肢装具自立支援学科
准教授 阿部 薫

「外反母趾」は足のトラブル、一方「扁平足」は遺伝によるものと思われがちですが、実はこの2つには関係がある場合もあるようです。外反母趾や扁平足とは、足のどのような状態を示すのか、そしてその対応策について本学義肢装具自立支援学科 准教授 阿部薫先生より教えていただきました。

足の親指が「く」の字に曲がった状態を外反母趾（がいはんぼし）といいます。また足の土踏まずが低くなって隙間がなくなった状態を扁平足（へんぺいそく）といいます。これらは別々の状態のようですが、実はとても密接な関係があるのです。

先のとがったハイヒールなどを履いていると、靴の形に押されて足の親指が外側（小指側）へ曲がってしまい、靴を脱いでも元の位置に戻らず「く」の字に曲がってしまいます。これは足指の根元の関節に体重がかかって足幅が広がり、親指の付け根の関節に負担がかかって亜脱臼を起こしている状態なのです。つまり親指側に体重が多くかかっているといえます。

一方、扁平足は足の骨格を支えている筋や靭帯がゆるんで、足の



アーチが低下して土踏まずがなくなり、床との隙間がなくなった状態です。後ろからかかとを見てみると、かかとは内側に倒れていることが多く見受けられます。これを外反扁平足（がいはんへんぺいそく）といいます。足が内側に倒れると、親指側に体重が多くなるようになり、外反母趾の原因と同じポジションになってしまいます。

つまり外反母趾が原因で外反扁平足になったり、外反扁平足が原因で外反母趾に進むことがよくあるのです。これらは同時に起こることもあれば、起こらないこともあります。少なくともその可能性はかなりあります。

若いうちは骨格や筋肉・靭帯などがしっかりしていますので、あまり問題視されませんが、中高年になるとだんだんとこのような問題が出てきます。何事も早めのケアが必要です。このため、足に合った靴を選び、ウォーキングなどの運動習慣をつけ、筋力を落とさないように気を付けることも大切です。靴は中敷にアーチ（盛り上がり）がついたものを使用すると、とても効果があります。一度、靴店に相談してみるのもよいでしょう。

プロジェクト研究センター及び健康スポーツ学科の地域貢献活動の紹介

「プロジェクト研究センター」は、従来の学部・学科の枠を超えて、新たに設けられた「研究推進機構」という独立した枠組みの中に設置されており、先端的、今日的な研究テーマに柔軟に取り組む研究組織です。今回は新しく8月に設立された「こころの健康支援研究センター」について、その取り組みをご紹介します。

また、本学健康スポーツ学科が行う総合型地域スポーツクラブとの関わりや活動についてご紹介します。

こころの健康支援研究センター設立について

1. こころの健康を取り巻く状況

現代は、こころの時代といわれてから久しく、その中でもうつ病については世界的に大きな課題であるといわれています。最近の調査では、7人に1人はうつ病にかかる可能性があるともいわれており、WHO(1999年)は、内科に通院している4人に1人は、うつ状態であると発表しています。この根拠を障害調整生存率(ある障害によって、その人の人生がどれくらい負担を強いられるか)でみると、うつ病は、発展途上国に多い結核やその他の感染症、また、戦争や交通事故で亡くなる人々を抜いて1位となっています。さらに、薬の世界的シェアからみると、うつ病の薬は胃薬について第2位の需要があることから、この病気の重要性が理解できます。“うつ病”が「こころの風邪」といわれるのもうなずけます。

他方、子どもたちをとりまくこころの環境はどうでしょうか。児童虐待は、子どもたちの心身に大きな影響を与えています。また、ある調査によると、小中学校の子どもたちの4人に1人は「疲れている」と答え、さらに、いじめの問題は、ますます潜在化してきています。いじめを受けた子どもたちは、こころが傷つき、しばしば不登校になったりすることもあります。このような子どもたちが、自信を持つことが出来ないまま大人になった時、対人関係のつまずきで苦しむことが多々あります。

発達障害の問題も、取り組まなければならない課題です。自閉症やアスペルガー症候群、学習障害や注意欠陥多動性障害等に対する正しい知識を持つことと同時に、早い時期からの適切なケアが望まれます。

2. こころの健康支援研究センターの活動について

さて、私たちは、今年8月に「こころの健康支援研究センター」を立ち上げました。目的は2つあります。1つは、精神保健福祉に携わる多職種間の連携を可能にするための連携プログラムの開発です。2つ目には、新潟市のこころの健康に関する実態調査とその支援です。メンバーは、現在、精神科医・看護師・助産師、臨床心理士・作業療法士・精神保健福祉士・社会福祉士から構成されています。

1) 多職種間の連携を目指して

こころの病を持つ人のQOLを支えるためには、それぞれの専門家同士の連携のあり方が問われます。連携の実践には、まず専門性の質の高さも重要ですが、専門家同士の多様性の尊重や、そこで起きる意見の対立をいかに建設的に解決するか、またリーダーシップも状況に応じて委譲していくなどの柔軟性が求められます。専門家同士といえども、これらの態度が最初から身につけているものではなく、質の高い連携を実践するためには一定の訓練が必要であると思われれます。この訓練の方法を導き出すのが連携プログラム開発の一つの役割でもあります。

しかしながら、こころの病は目に見えないものであり、私たちが援助の対象となる人について知っていることは、ほんの一握りです。

このため、専門家の知識を優先させた一方的な関わりでは、十分に理解できるものではないように思われます。そこで、「多職種間の連携」を研究する上で、誰よりも病について経験している当事者その人が、連携の環の中に一員として参加していくというあり方を模索しております。

こころの病を持つ方々は、生きてきた過程の中で人間関係に傷つき、自信が持てないまま社会から身を引いたり、病気によっては意欲をなくしたりという状況の中にいることが多いと思われれます。

社会復帰をしていく上で、これらの状態を少しでも改善し自己評価を高めていくという方法の1つとして「治療共同体」の考え方があります。この治療の方法は、心の病を持つ人たちが、集団療法を通して意欲を高めること、対人関係の改善を図ること、また病院の大小様々な組織に主体的に参画していくというもので、1960年代、イギリスのマックスウエル・ジョーンズ等が精神医療の中で実践して来ました。この集団療法がフロイトの精神力動や人間関係論等を活用したものであり、それぞれが自己を見つめ、自己の弱みや強みを知り、他の人と関係を作っていくための方法を身につけ、自己主張の仕方や感情のコントロールの仕方を身につけていきます。専門家たちも集団療法の中では、自己の在り様を問われます。

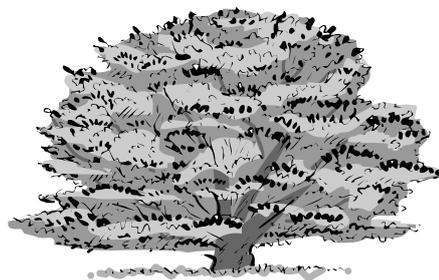
以上のことから、本センターでは「多職種間の連携」をテーマにプログラムを開発していくことが課題と考えております。



看護学科 准教授
金谷光子

2) こころの健康支援について

2つ目のテーマは、すでに1.で述べた様々なこころの健康について実態調査を行い、それに対応するような支援を行っていくことです。まずこころの病に対する知識の普及のために、H20年より市民を対象とした学習の場を開催いたします。また、今後はホームページを作成し、こころの病についてのネットワークづくりを考えています。



総合型地域スポーツクラブと健康スポーツ学科の関わり

■背景

2000年9月、文部科学省は「スポーツ振興基本計画」という政策を打ち出しました。その中には、2010年までの10年間で全国の市町村に『総合型地域スポーツクラブ』を最低1つ作るという政策目標があります。主たる目的は、高齢社会における医療費の軽減、地域における青少年の健全育成、国民の経済中心の生活や価値観から文化度の高い生活や価値観にシフトするといったことがあげられます。この総合型地域スポーツクラブは、ドイツを中心としたヨーロッパ先進諸国のモデルを日本版に改良したものであり、先の3つの目的を達成するための有効な政策として位置づけられています。2007年現在、全国約1,800市町村のうち、約800市町村にNPO法人の総合型地域スポーツクラブが設立され、2010年までに残りの市町村でも次々と新設されることでしょう。いつでも誰でもいつまでも、生涯にわたって我々の住む地域で、気軽にスポーツ文化を享受することができ、健康の維持増進を図ることのできるクラブを全国の市町村が創設すべく計画が進行しています。本学の周辺地域でも、「ハピスカとよさか」「スポネットせいろう」「ウェルネス村上」といったNPO法人総合型地域スポーツクラブが既に設立され、それぞれの地域特性に応じた魅力あるスポーツクラブ運営がなされています。

健康スポーツ学科は、このNPO法人総合型地域スポーツクラブの設立支援や事業企画提案を行ってきたことから、現在は、学生主体による連携事業の実施やインターンシップ実習、スポーツイベントの支援といった様々な関わりを持って、大学と地域スポーツクラブが共に成長していくよう、地道な活動を行っています。

■連携事業の活動内容

①NPO法人のマネジメント支援

現在、産声を上げたばかりの多くの総合型地域スポーツクラブは、国や地方自治体からの補助金収入の割合が多く、また、マネジメント力に乏しいことから、自立した運営ができていないケースがあります。そこで、自立したNPO法人の運営ができ、地域住民のニーズに応じた健康づくりプログラムやスポーツ事業を提供できる魅力あるクラブになるように、健康スポーツ学科は様々なクラブに対してマネジメント支援を行っています。図1は、スポーツクラブを運営していく際の基礎的な事業のマネジメント機能ですが、この一つ一つのフレームについて細かなアドバイスを行っています。例えば、カネ(資金)に関しては、会費や参加費の設定として、原価主義、サービス主義、競争主義といった原則に則った適正価格を設定して、地域住民が満足できるようなスポーツサービスを提供できるように、各スポーツクラブに指導助言を行っています。公共財としてのスポーツ、公共財に縛られない自由なスポーツ、地域の身近に存在するスポーツ、対価を払うクオリティの高いスポーツなど、さまざまなスポーツの在り方を地域スポーツクラブとともに考えながら事業を実施しています。

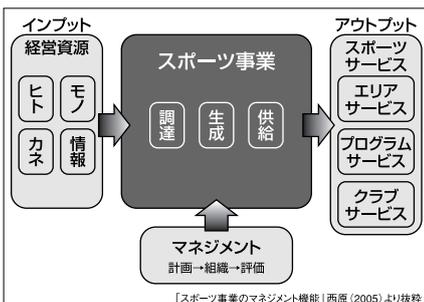


図1/スポーツクラブ運営における事業マネジメント機能 [スポーツ事業のマネジメント機能] 西原(2005)より抜粋

②学生の参画による事業連携

総合型地域スポーツクラブの「総合」には、3つの意味があります。

1つ目は、さまざまなスポーツ種目や運動メニューが用意されているということ、2つ目は、老若男女問わず、さまざまな人のためのメニューが用意されているということ、3つ目は、スポーツや運動が得意な人、不得意な人を問わず、さまざまな運動技能に応じたメニューが用意されていることです。健康スポーツ学科の3年生十数名は、現在ハピスカとよさかを中心にして、このさまざまを一つの時間帯で一つの空間で可能にすることができないかを考え、事業企画と事業の実践を行なっています。特に、小学生の子どもと高齢者が同じ空間で同じスポーツを「共に楽しむ」ために、どんな事業を行ない、どんなスポーツ指導を行えばよいかを実践を通して学んでいます。写真は、子どもたちを対象とした学生の関わりの様子を示しています。どのように子どもと関わればよいのか、どのように高齢者と関わればよいのか、どのスポーツや運動をどう提供していけばよいのかといったことを実践経験の中で悩み、リフレクション(内省)しながら、学生は徐々に成長していきます。現在は、この活動を2年生にも広げ、3年生から2年生に伝達すると共に、3年生、2年生のそれぞれの力量に合わせて子どもたちや高齢者と関わっています。この活動が健康スポーツ学科の伝統となって伝承されていくことを期待しています。



健康スポーツ学科 准教授 西原康行



はじめは、どうやって子どもたちと関わればよいか、わかりませんでした。1ヶ月後、やっと子どもたちと関わりが持てました。

今は良きお兄さんお姉さんとしてスポーツ指導をしています。

③今後の展開

先のスポーツ振興基本計画では、総合型地域スポーツクラブを市町村に最低一つ作ることを目標に掲げるとともに、総合型地域スポーツクラブを統括する『広域スポーツセンター』を各県に一つ作ることも政策目標として掲げられています。図2にも示した通り、この広域スポーツセンターの機能は、

1. 各スポーツクラブのスポーツ指導者・クラブマネジャーの育成
2. 各スポーツクラブのスポーツ指導者・クラブマネジャーの研修・リカレント教育
3. 各スポーツクラブのマネジメント支援
4. スポーツ指導者、スポーツ施設、運動指導法などのデータベースの構築と情報提供
5. 実践的スポーツ科学の調査研究とクラブへの還元

です。しかしながら、各県が新たにこのような機能を備えたセクターを作ることは難しく、スポーツ系の大学がこの機能を担うことが期待されています。今後は、新潟県の広域スポーツセンター機能の一部を担うことが課題となります。

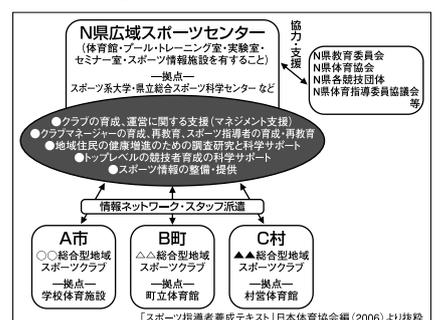


図2/広域スポーツセンター機能と総合型地域スポーツクラブの関係 [スポーツ指導者養成テキスト] 日本体育協会編(2006)より抜粋

第7回 新潟医療福祉学会 学術集会の報告

昨年10月、看護学科が事務局を務め、「第7回新潟医療福祉学会 学術集会」が本学にて行われました。今年度の学術集会は研究発表に加え、教育講演や交流セッションといった多彩なプログラムが用意され、総勢260名あまりが参加する活気ある会となりました。

看護学科
准教授 中山和美

看護学科が半年をかけて準備してきた新潟医療福祉学会第7回学術集会を10月27日(土)に開催いたしました。今回のテーマは「ケアの専門性と地域貢献—教育・研究・実践」で、趣旨に沿った様々な企画を用意しました。そこで、初の試みとして学術委員会と連携し、学術集会全体に新潟市、新潟県、新潟県看護協会、新潟県理学療法士学会、新潟県作業療法士学会、新潟日報社の後援を得ました。

さて、当日は冷たい秋雨が降り、あいにくの空模様となりましたが会員は約100名、非会員160名程とこれまでになく多くの方々が参加してくださいました。

研究発表は午前の口演と午後の示説の二部構成としました。口演は大講堂で10題、K棟で行われた示説では31題の発表がありました。本学会は様々な分野から成り立っていることを反映し、各々に活発な質疑応答や意見交換が行われました。特に今年度は高橋榮明学会会頭の要望で、前年度の優秀な卒業論文を各学科よりご推薦いただき発表してもらうことができました。若い方々に発表の機会を提供することで、研究活動促進につながるものと期待しています。

教育講演には群馬大学大学院医学研究科教授の服部健司先生を招聘して「ケアの専門性と倫理的課題」についてお話しいました。医師であると同時に哲学を学ばれた先生は、医療倫理の著書も多く大変分かりやすい内容の講演でした。教員、学生、臨床スタッフなど聴講された多くの方が「有意義だった」「参考になった」と好評でした。また、この講演を通して日常の臨床場面において医療倫理が問われることを再認識しました。

次いで、今回の学術集会では多職種間ならびに地域との交流を意図して交流セッションを企画しました。「健康長寿交流セッション」「子どもの発達と健康科学」の詳細は7ページをご覧ください。「摂食・嚥下障害のケア」は、新潟リハビリテーション病院の言語聴覚士の方や新潟脳外科病院の看護師の方にも話題提供者になっていた



K棟で行われた研究発表（示説）

たき、具体的なケアについて示唆を受けました。臨床の看護師や学生にとって参考になったようです。「看護基礎教育と卒後教育における大学と臨床の連携」では新潟市内にある看護学科をもつ三大学の教員の方と済生会新潟第二病院の師長様の4人を中心に意見交換が行われました。フロアからも活発な意見交換があり、今後の看護教育のあり方を考える機会となりました。「精神医療における多職種との連携」はこころの健康支援研究センターが主催したセミナーでしたが、こころの病をもつ人の自立に係わる専門家が集合して連携に



服部健司教授の講演会

ついて活発な討論が行われました。

研修の一環として参加された新潟病院附属看護学校2年生の38名の皆さんは熱心にメモを取り、示説会場や交流セッション会場でも積極的に質問する姿が見受けられました。

至らぬ点も多々あったかとは思いますが、参加された皆様にとって有意義な一日となったようで、企画運営したものとして無上の喜びとなりました。

最後になりましたが、関係各位のご協力とご支援に感謝申しあげ、報告を終わります。

【プログラム】

- 9:45~11:45 医療・福祉・健康科学に関する研究報告（口演）
- 12:10~14:40 医療・福祉・健康科学に関する研究報告（示説）
- 12:30~13:00 新潟医療福祉学会総会
- 13:00~14:00 教育講演「ケアの専門性と倫理的課題」服部健司教授
- 14:50~16:20 交流セッション
「健康長寿交流セッション」
「子どもの発達と健康科学—体育・食育・生育の立場から」
「摂食・嚥下障害のケア」
「看護基礎教育と卒後教育における大学と臨床の連携」
「精神医療における多職種との連携」



セッション受付（の血圧測定）では看護学科2年生が活躍

第7回 新潟医療福祉学会 学術集会では、5つの交流セッションを行いました。その中で市民講座として市民の方からもご参加いただいた「子どもの発達と健康科学—体育・食育・生育の立場から—」と「健康長寿交流セッション—転倒予防・運動・食事・介護予防の立場から—」について、そのセッション内容をご紹介します。

子どもの発達と健康科学—体育・食育・生育の立場から— 看護学科 講師 松井由美子



第7回新潟医療福祉学会では、メインテーマである「ケアの専門性と地域貢献」を受けて、5つの交流セッションが開かれました。そのうちの2つは地域の方を対象に企画された市民講座で、一つがこの「子どもの発達と健康科学—体育・食育・生育の立場から—」という子どもの養育に関わる保護者や専門家を対象としたセッションでした。本学健康スポーツ学科から石川知志先生、健康栄養学科から塚原典子先生、看護学科から岩田みどり先生に話題提供者となっただき、それぞれご専門の研究の

中から「子どものスポーツ障害」や「子どもの食事の重要性」「子どもの生活と安全」について、簡潔にわかりやすい内容でお話していただきました。

悪天候にもかかわらず多くの方に参加していただき、会場の方からのたくさんの質問で意見交換も活発に行われました。新聞を見てこられた中学生を持つ保護者の方からは、「野球部に入って肩の痛みを訴えるようになったことがとても心配だ」と話されました。また、「カルシウムを取るために牛乳は効果的ではあるが、アトピー疾患などのアレルギーがある場合はどうしたらよいのか」といった質問もありました。安全については、「子どもの危険防止に過剰になりすぎて、逆に子どもの発達を妨げることになるのでは」といった問題提起がなされ、討議が一層盛りあがったように思います。また東京などで行

われている保護者を対象とした「子どもの安全講習会」についての質問もあり、新潟でも今後そういった取り組みがなされていく必要があることも、このセッションで確認されました。

大切なことは、子どもの養育に関わるすべての人たちが、子どもの置かれている状況をしっかり見極める能力を身につけることだということで、そのためにもこのような専門知識を共有する場がますます重要になってきます。大学を拠点に今後も地域に貢献できる活動の場を広げていきたいと思っています。



健康長寿交流セッション—転倒予防・運動・食事・介護予防の立場から— 看護学科 教授 梨本光枝



このセッションは健康長寿時代を生き生きと過ごすために、地域で取り組むことができる介護予防・転倒予防・閉じこもり予防のための具体的な方策として本学のそれぞれの専門領域の先生がリレー方式で運動・食事・生活全般をわかりやすく実践を交えてお話をいただくという形で企画いたしました。フロアからは新潟市北区の老人クラブ連合会からご参加いただいて実際に取り組んでいる健康法などを発信してもらい、活発な意見交換を行い、今後も大学と連携して共に健康長寿を考えていける土台づくりを目指したいと考えています。参加者は老人クラブから60名、一般から約20名の参加がありました。交流セッションのオ

ープニングには太郎代地区の老人クラブの皆様による「北国の春」「ズンドコ節」のメロディーに合わせた健康体操をご披露いただき、ほかの参加者も一緒になって楽しく手足を動かしました。会場が和んだところで、セッションメニューの一番に「閉じこもりと生活不活発」について理学療法学科の小林量作先生から高齢者の3割が外出頻度が極めて少ない閉じこもりであることのデータが紹介され、生活不活発病予防のポイントについて①横にならずなるべく座る。②動きやすいように身の回りを片づけておく。③安全第一・無理は禁物と思いきまなど絵や図を活用して説明いただきました。続いて看護学科の西脇友子先生からは介護保険受給者の現状をお話いただき、要介護状態になっても「あきらめない」こと。筋力を保ち、食と丈夫な歯と頭を使った生活で、身体の衰弱と転倒、認知症から遠ざかろう！と提案。それを受けて健康栄養学科の斉藤トシ子先生からは、「介護予防の食事」と題してさまざまな食材のフードモデルを

使って1日に必要な栄養をいかにして手軽に摂取できるかなどをわかりやすく説明をいただいた。食に関しては女性の参加者が多かったせいか質問がたくさん飛び交いました。セッションの最後に健康スポーツ学科の高橋一栄先生の椅子に座っても出来る・一人でも出来る・確実に筋力がアップする簡単な筋力トレーニング法の実際を参加者全員で体得することが出来ました。今回はじめての試みで、大学の位置する北区の老人クラブ連合会に働きかけ交流を深めることが出来ました。大学といった壁を越えて気軽に参加していただきました。今後も地域との連携を密にして健康長寿の様々なプログラムを開発し、どんどん大学から飛び出して交流に取り組んでいきたいと考えています。



学外実習の報告

理学療法学科

私は石川県の金沢西病院と、栃木県の自治医科大学病院の2施設において各7週間の臨床実習をさせて頂きました。前者は地域密着型の病院であり、患者様の退院前に自宅訪問し、実際に家庭での様子を評価しそれを治療に反映させるなど、自宅復帰へ向けた過程を学ぶことができました。後者の大学病院では、急性期のリスク管理を中心に学びました。急性期の患者様の状態は日々変化するため、機能の回復過程にあった理学療法プログラムの立案、実施に苦労しましたが急性期における理学療法の重要性を感じました。両者の実習から、病棟との連携や必要に応じ様々な環境の中で理学療法を実施し、患者様の機能を高めていく方法を学び、それらの重要性を感じています。

私は臨床実習を通して、理学療法士は患者様の回復過程にアプローチすることができ、回復の手助けができる素晴らしい職業であるということを実感しました。臨床実習は大学生活の中で最も考え、苦労した時間でしたが、同時に理学療法のやりがいや面白さを感じることができ、大変充実した実りある日々でもありました。私は、理学療法士になったら視野を広く持ち、様々な視点から常に「考える・見直す」という臨床実習で学んだ姿勢を持ち続け、患者様一人ひとりに適した理学療法を提供できるように日々努力していきたいと考えています。



理学療法学科4年
青木美幸

学外実習で得たこと

作業療法学科

臨床実習は、直接患者様と関わり実際の症状を見て授業で学ぶだけでは分からなかったことを理解できる貴重な科目だと思います。実習中は患者様のことについてはもちろん、他にも基本的なことではありますが社会人としての自覚や、行動、対応のとりかたなどを考えたり、スタッフや患者様とのコミュニケーションの仕方を考えたりと、考えなければならぬことは多かったです。しかし、その中で作業療法士として患者様に何をすべきか、何が必要なのかという考え方や、それを考える重要性を学べたと思います。自分自身の未熟さを痛感することも多かったです。そのつど実習指導者からアドバイスをいただくことで知識を深め、より成長することが出来たと思います。

また、実際の現場に実習に出たことで、病院ごとにそれぞれの領域や分野の特徴を知ることができ、希望の就職先を決めるきっかけを見つけることが出来ました。他にも他校の学生と助け合って実習を乗り越えたこともいい思い出となり、実習先で出会った仲間も実習で得た大きなものだと思います。大変ではありますが、振り返ると自分を大きく成長させてくれる4ヶ月であり、一生忘れない4ヶ月だったと思います。



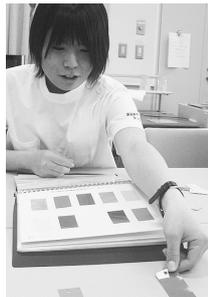
作業療法学科4年
小熊ゆみ

総合実習を終えて

言語聴覚学科

今回私は10週間という長い期間で、実習をさせて頂くことができました。その中で印象に残っているのは手術の後、重い麻痺で話すことも歩くこともできなくなった患者さんのことでした。いつもリハビリに積極的で、よく病院の中を散歩したり、沢山の話をしてくれるとても気さくな患者さんただけに、私もショックを受けました。病気は今まで苦労を感じることなく生活していた自分が大きく変わってしまい、支える側の家族の悲しさも大きく、大変なものであると実感しました。少しでも患者さんと同じ気持ちに立って障害の辛さを感じながら支えになりたいと思っても、完全にその人の気持ちを味わうことはできません。しかし、その患者さんを知りたいと思うことで、その人の性格や何に興味を持っているのかなど、知る事ができます。ことばが交わさなくても、伝えたいことがわかることもあります。誰かと向き合うためには、その人を知りたいと思うことが大切だと感じました。

他の実習生と訓練の相談をする中で、1人の患者さんに対していろいろなアプローチがあることや、他職種とのチームアプローチを体験できて、大変いい勉強になりました。指導をしてくださった先生方には沢山の経験をさせて頂き、また、1人の人として、いろいろなことに責任を持って過ごす事ができました。いつか私も言語聴覚士として頑張りたいという気持ちが強くなった実習でした。



言語聴覚学科4年
新里彩

今後の学外実習予定について

義肢装具自立支援学科

義肢装具自立支援学科は今年度開設した新学科で、現在は4月に入学した1年生のみが在籍しております。学外実習は2年次以降のカリキュラムに設定されているため、実施は来年度から開始されます。

本学科では、学外実習を2、3そして4年次に行います。2年次は、「臨床実習Ⅰ」として、さまざまな施設を“見学する”実習です。見学コースは3つを予定しています。義肢装具関連施設と福祉用具・福祉機器関連施設にて、日常業務を見学するコースがそれぞれ1つあります。もう一つは、障害を持つ人のご自宅を訪問し、義肢装具や福祉用具・福祉機器がどのように使われ、役に立っているのかを勉強するコースです。3年次は「臨床実習Ⅱ」として「義肢装具関連施設」での実習です。ベテランの義肢装具士から指導を受けながら、医療・福祉スタッフの一員である義肢装具士の役割と業務を、実務を通して学びます。4年次は「臨床実習Ⅲ」として「福祉用具関連施設」での実習です。主に車いす・シーティング製作企業、住宅改修企業そして福祉用具・福祉機器の開発・販売企業にて、指導を受けながら臨床と企業内業務を、実務を通して学びます。これら3回の学外実習は、本学科のコンセプトである“福祉用具・福祉機器分野の知識と技術を持つ義肢装具士になる”を具体化した一連のプログラムになっています。



義肢装具自立支援学科 講師 大塚 博

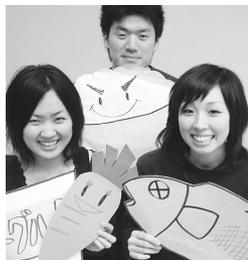
臨地実習(公衆栄養学実習Ⅱ)を終えて

健康栄養学科

村上地域振興局健康福祉部での実習は、保健所と市町村の栄養士業務に同行させて頂きました。同行した先々で栄養士の方や他職種の方々のお話を聞き、実際の栄養士業務を体験することで、私たちは地域に携わる業務内容の幅の広さや膨大さを知りました。

私たちが協力して取り組んだのは、朝日村食育事業「三世代交流のチビッコッキング」等における、劇を取り入れた栄養おりがみ教室の計画・実施でした。計画の段階では大学で学んだ知識を活かして工夫を凝らしましたが、対象者が保育園児とその保護者、地域の高齢者であり、その中でも特に幼児に分かりやすく伝えることが一番の課題となりました。加えて、私達はこれまでに実際の対象者がいる栄養教育を行ったことが無かったため、対象者の反応がわからず、本番を迎えるまではとても不安でした。しかし、本番を終えてみるとオリジナルの劇は好評で、幼児やその他参加者の反応も良く、とてもよい経験となりました。

今回の実習を通して、子供達との触れ合いや地域の方々との協力する中で、栄養士とは人々と連携し、地域の心と体の健康づくりを担っていることを学びました。この経験を今後の大学生活・将来に活かせるよう、より一層勉学に励みたいと思います。担当して下さった管理栄養士の先生方ならびに協力してくださった皆様に厚く御礼申し上げます。



健康栄養学科3年
増田早希・加藤智徳・米田美賀子

インターンシップ実習に参加して

健康スポーツ学科

私は現在までの大学生活を通して、「サッカーの指導者」という具体的な夢を持つことが出来ました。その夢を学ぶ場として、私はアルビレックス新潟ジュニアユースチーム(13歳~16歳)のインターンシップ実習に参加しました。

実習では、監督・コーチと共に行動し、時に何人かのグループを実際に自分が指導することもありました。

実習で私が1番良かったと思うことは、やはり実際の現場を体験できたことでした。もちろんサッカーの指導やトレーニングに関しても学ぶことがたくさんあり、実際に指導した時は、まだ自分の力の無さに気がつきました。また、それ以外に直接その現場にいないと体験できないこともたくさんありました。例えば、練習中に怪我をした選手への対応や練習終了後にサッカーだけではなく、学校生活のことで話を聞いているコーチの姿です。指導者という職業を狭い範囲でしか見ることができていなかった私に、今回の実習はもっと広い範囲のものであるという新しい考えを与えてくれました。

インターンシップ実習に参加し、自分の目指している職業をする人達と共に行動すること、そして、その職業を体験することで新たな魅力や自分に足りないものを見つけ出すことが出来ました。今回の実習を通して、さらに自分の夢を現実にするための新しい一歩を踏み出せたと思います。



健康スポーツ学科3年
林 遼太

基礎看護学実習Ⅱで学んだこと

看護学科

今回の2週間の基礎看護学実習Ⅱでは、受け持たせていただいた患者さんにとってどんなことが問題となっていて、どんな援助をしていったらいいのかアセスメントし、看護計画を立てて、実際に援助を行いました。実習期間の中でコミュニケーションをとって関係を築いていくうちに、患者さんは私に自分の病気についての心の内を話してくださいました。病院という閉ざされた空間で病気の不安、恐怖、葛藤など様々な思いを抱えながら生活している患者さんの言葉一つ一つはずっしりと重みがありました。その時私は患者さんの言葉に何か言葉を返したいという気持ちはありましたが、患者さんの真摯な思いを簡単な言葉で済ませることが出来ず、何も言えない自分自身にもどかしさを感じました。しかし、この実習を通して、言葉で励ましていくことも大切なことですが、必ずしも言葉が必要ではないということ、言葉を返さなくとも傾聴し、共感し受け止めることの大切さを学びました。「患者さんの側で話を聞くこと」は簡単なことのように思えますが、看護師の忙しい業務の中で、個々の患者さんとは限られた時間内でしか関わることが出来ません。その中で適切な治療が受けられるように環境を整え、ケアを行いつつ、日々病室で様々な思いを抱えた生活をしている患者さんの不安を受け止め、心の支えになる看護師の役割の大切さを忘れずに、患者さんが笑顔になれるような看護を提供していきたいと思っています。



看護学科2年
関川綾奈

多くの事を学んだ実習体験

社会福祉学科

私は20日間社会福祉協議会で実習させていただきました。実習で、今まで講義で学んできたことを実際に体験したりしたことで、改めて理解できたことがたくさんありました。特に印象に残っている体験は柏崎市の災害ボランティアセンターでの活動です。柏崎市の災害ボランティアセンターで、仮設住宅の声かけの活動に参加したことによって、相手のニーズに答えたり、相談を受けたりしていくためには、何よりも信頼関係の形成が大切であり、そのためにはコミュニケーションが不可欠であるということが改めて理解できました。また、人の生活状況やニーズは時間とともに変化していくということも感じることができました。そして、その変化を常に把握するため、新たなニーズにどのような対応が必要であるのかをより多くの情報によって検討していくために、他機関・他施設との連携は不可欠なものであるということボランティアセンターの活動から学ぶことが出来ました。

また、声かけの活動を行ったことで、こちらから働きかけるというアウトリーチの大切さも学ぶことが出来ました。

今回の実習では、多くの体験によって多くのことを学ぶことができ、自分の視野を広げることが出来ました。これを踏まえて、これからさらに視野を広げていくために多くのボランティア活動などに積極的に参加していきたいと思っています。



社会福祉学科3年
鈴木沙織

部活動紹介

大学には多くの部活動やサークルがあります。その中から今回は、4つの部活動を取り上げて紹介します。

吹奏楽部

私たち吹奏楽部は毎週月曜日と木曜日に第二厚生棟で活動しています。入学式や卒業式、伍桃祭などの学校行事や依頼演奏が主な発表の場です。今年は地域の運動会や特別養護老人ホームなぎさの里などから依頼があり、喜んでもらうことができました。吹奏楽は屋内でも屋外でもどんな季節でもできるので、行事などが続き一年を通して本番まであと一ヶ月という状態が何度も続く忙しい時もあります。中学校や高校の時のように毎日部活ができるわけではありませんが、楽器を吹くことはとても楽しいので部活の後に残って吹いていく人もいます。

全員そろっての練習がなかなかできず、人数や楽器が足りないパートもあり、演奏を作っていくのはとても大変ですが、少ない練習時間を有効に使えるように頑張っています。

今は卒業される先輩や来年入学してくる後輩に喜んでもらえる演奏ができるように卒業式や入学式にむけて練習しています。これからもできるだけ多くの人に私たちの演奏を聞いてもらえるように、より良い演奏を目指して練習していきたいです。



吹奏楽部 部長
福田郁里
(作業療法学科2年)

卓球部

卓球部は毎週木曜日の6時から第二体育館で活動しています。3年生が引退した今部員は新2年生の5人だけです。人数は少ないけれど、みんなとても楽しくやっています♪

昨年度までは市民戦等の新潟市内で行われる大会に参加していましたが、今年度からは県外の大会等にも積極的に参加したいと思います。一昨年の東日本医歯薬大会での先輩方の残してくれた輝かしい記録に少しでも近づけるように頑張っており、これからも様々な大会に出場するつもりです。

また、今年度は週1の練習回数でしたが、今年度は練習量も増やしていけたらと思います。

大学祭では毎年恒例の安くておいしいホットケーキ屋を出店しています。毎年1日目しか行っていませんが、大盛況で楽しい上に、やりがいがあります。

こんな卓球部ですが、遊びにまじめにどちらでも大歓迎なのでよろしくお願ひします。



卓球部 部長
大久保和希
(理学療法学科1年)

バレーボール部

こんにちは！私たち男女バレーボール部はチームとしてのレベルアップの為に日々練習に励んでいます。練習は毎週月・水・土・日曜日に男女交互に行っています。練習時間は平均して二時間半位です。男女共に練習をつけてくれる監督がいない部ですが、練習メニューなどすべて自分達で考えてそれを実行し、大学生らしい部活をしていると思っています。

今年の結果は、男子は春の北信越大会で二部に昇格し、女子は秋の北信越大会で念願の一部に昇格しました。この結果は引退した先輩方がいてくれたからこそこの結果だと思っています。来年は個々の力を伸ばし、また練習試合などもより多く行い、チームとしてもよりレベルアップすること、そして男子は一部昇格、女子は一部上位を目指し練習に励んでいきたいです。



バレーボール部 部長
関根康浩
(理学療法学科2年)

剣道部

私たち新潟医療福祉大学剣道部は、部員数は多くありませんが毎週欠かさず練習をしている、活動が盛んな部です。練習は毎週火曜日と木曜日の6時30分から8時頃まで第二体育館で行っています。練習方法は学生が自主的に考えますが、みんな一つのこと一生懸命取り組むこと、そしてみんなで楽しむこと、この二つを中心に考えて活動内容を決めています。決して練習量は多くありませんが、初心者から小学校で剣道を始めてその後ずっと続けている活動歴が長い人まで、様々な人が一緒に汗を流して楽しく活動をしています。

また剣道部は、大学の剣道連盟に加盟しているので公式の大会にも参加しています。その他にも新潟県で行われている一般の大会にも積極的に参加しています。女子の部は昨年度惜しくもベスト8で終わってしまいましたが、大学連盟に登録したばかりなのでこれからの活躍を期待してください。これからもみんなで協力してもっと活発に活動していきたいと思っています。



剣道部 部長
渡辺達春
(健康スポーツ学科3年)

総合ゼミ発表会

9月21日(金)、総合ゼミの発表会が行われました。総合ゼミとは、本学の専門職間連携教育の最終段階として4年次に開講される科目で、複数学科の学生が少人数グループを編成し、現場実習での経験および各分野の専門性に基づき具体的な事例の検討を行います。学生はこうした活動により専門職間の連携による課題解決と協力の重要性を認識します。その後行われる発表会ではグループごとに各事例の評価と支援策の案を発表し、参加者(学生・教員)からフィードバックを受けることで、より実践的に連携について学ぶことができます。

当日は、各グループで15分～25分の発表が行われました。総合ゼミは、来年度から正式に実施される科目であるため今回の発表会は最後の試行として行われましたが、学生の取り組み方は真剣そのものでした。参加した学生からは「実践的でとても興味深く取り組めた」「他の学科の学生とこんなに検討したのは初めてだったが、協力して良いプログラムを作成できたのでとても勉強になった」など、総合ゼミでの取り組みを評価する声が寄せられ、実践的な学習の場として良い経験となったようです。

本学では、今回の結果を踏まえ、来年度の本格

実施に向けた改善を行い、保健・医療・福祉の総合大学として特色ある教育を更に推進していきたいと考えています。

【研究対象事例】

- 身体障害系…(A班)脳卒中後遺症の男性のケース、(B班)神経難病(ALS)の男性のケース
- 発達障害系…一人暮らしをしたい脳性麻痺の男性のケース
- スポーツ障害系…膝前十字靭帯損傷の大学生スポーツ選手のケース
- 生活習慣病予防系…メタボリック症候群の疑いがある男性のケース

「水泳」「陸上」「サッカー」「バスケ」強化指定部の実績報告

9月、10月と各地で様々な大会が開かれ、本学強化指定部においても様々な活躍がありましたので、ご報告します。

水泳部 全日本インカレ6位入賞！！

9月7日(金)～9日(日)、日本学生選手権水泳競技大会(全日本インカレ)が行われ、水泳部からは健康スポーツ学科3年の澤田涼が昨年に引き続き決勝進出800m自由形で見事6位入賞を果たしました。

サッカー部 小熊大海選手が新潟県国体選抜としてサッカー青年男子の部で準優勝

9月30日(日)秋田県にて開幕した秋田わか杉国体サッカー成年の部が行われ、新潟県成年国体

選抜が準優勝を修めました。この選抜チームには本学サッカー部の健康スポーツ学科2年 小熊大海が選出され、北信越国体予選及び国体に出場しました。国体では惜しくも千葉県に敗れたものの、決勝戦まで勝ち進むことができました。

女子バスケ部 北信越学生選手権 初優勝！

2年連続2回目のインカレ出場

10月18日(木)～21日(日)、北信越学生バスケットボール選手権が行われ、女子バスケットボール部が見事優勝を果たしました。なお、11月に行われた第54回全日本学生選手権大会(インカレ)では、惜しくも初戦で筑波大学に敗れるも、2年連

続2回目となるインカレ出場を決め、北信越の新女王として、今後も連続優勝を目指します。

陸上競技部 全日本学生陸上チャンピオンシップ3000m障害で3位入賞！

9月8日(土)、9日(日)と全日本学生陸上チャンピオンシップが行われ、強化部1年目となる本学陸上部では、健康スポーツ学科3年の牧良輔が3000m障害で3位、1500m障害で5位に入賞することができました。

今後とも強化指定部への応援を宜しくお願いします!!

「食と花の世界フォーラムにいがた2007—食の国際見本市」参加報告

10月24日(水)～10月28日(日)の5日間にわたり新潟市の主催で「食と花の世界フォーラムにいが



た2007」が開かれました。本学からは、健康栄養学科の村山伸子先生が「市民シンポジウム」にパネリストとして、また同学科の教員と学生がイベントの1つである「食の国際見本市」内の展示で参加しました。今回の「食の国際見本市」には、「産学研究ゾーン」はじめ「国際ゾーン」「一般食品・食品関連ゾーン」「ふるさと食品ゾーン」があり、「産学研究ゾーン」では、本学科の数教員も所属する「フードサイエンス・センター(産官学の連携共同研究センター、事務局:新潟大学農

学部内)」から11の出展があり、うち本学科分としては、「キュウリ、キャベツの食味に関する感覚計量学的な研究(玉木有子先生)」、「食と肥満予防—運動との関わり—に関する研究(川上心也・川中健太郎両先生)」、ならびに「もち米配合によるグルコマンナン(健康栄養学科4年・大川友貴君・同学科6教員)」の3展示がありました。県内外の食品関連業界の方々には言うに及ばず、多くの一般市民の方々にも展示内容を紹介することができました。

義肢装具自立支援学科「第4回新潟福祉器機展」に出展

11月24日(土)～25日(日)、新潟市産業振興センターにて第4回新潟福祉器機展が開催され、本学より義肢装具自立支援学科が出展参加しました。この展示会は、日本全国から福祉車両、車いす、義肢装具、シーティング、生活支援器機などの福祉器機・用具のメーカーが出展しています。また新潟県の医療福祉専門職団体のブースなどもあり、本県福祉器機関係の一大イベントとなっています。こうした中、大学として唯一出展した義

肢装具自立支援学科は、開設間もない本学科について広く知っていただくことはもちろん、保健・医療・福祉分野の研究基地としての本学の役割についてご理解していただくことを目的とし、多くの方に耳を傾けていただくことができました。また、ブースでは学科紹介のパンフレットやパネルの展示の他、「製作実習体験」として皮革を用いたストラップ作りを行い、人気を集めていました。また参加した学生は学科ブース以外

でも、学生ボランティアとして会場全体の係を担当するなど、直接ユーザーの方々とふれ合うことができ、大変勉強になりました。



伍桃祭を終えて

第7回伍桃祭(大学祭)報告

今年は、この伍桃祭を通して学内の人達だけでなく、地域の方々、障がいのある人などたくさんの人々が出会う機会となり、あらゆる人々とのかけはしになりたい。そのかけはしがこれから先も無限(∞)に広がり、一人ひとりが持っている個性を「光」として放ち、輝くものになりたいという願いを《「光」～8色の虹=のかけはし》というテーマに込め、それをもとに伍桃祭を企画しました。

中村真衣(シドニーオリンピック女子100m背泳ぎ銀メダリスト)さんの記念トークをはじめビンゴ大会やミニ運動会では、多くの一般の方にも参加していただきました。



福祉・地域・学生・一般の方それぞれが一体となることができ、さまざまな虹のかけはしを創ることができたのではないでしょう

ヒルクライムさん・笹川美和さんのライブ、学生参加型のイベントは、伍桃祭に来た方々全員が盛り上がり、楽しめたのではないかと思います。

これらのイベントを通じて、



か。ここで築きあげた虹のかけはしが一人ひとりの中で、これから先も少しずつ大きなものになり、あらゆる光として輝いてほしいと思っています。

伍桃祭当日は天気にも恵まれ、予想以上の大勢の方々に来場していただき、とても盛り上げることができたと思います。ここまで盛り上げることができたのも、学内の方々や地域の方々をはじめ、たくさんの方々にご協力をしていただいたおかげだと思っています。伍桃祭を開催するにあたり、お世話になりました方々に熱く感謝の意を示します。本当にありがとうございました。

伍桃祭実行委員長 中野美沙

同窓会

同窓会総会/首都圏支部設立総会の報告

10月27日(土)、第3回新潟医療福祉大学同窓会総会が行われました。今回の総会での主な議題は、本会発足時から課題となっている会員の加入率増加や、会費の納入率の低さを解消するための会則の変更でした。本会のスムーズな運営や今後の発展のため、「終身会費」制度を設けさせていただきました。施行日につきましては、今後大学側、後援会側との協議後に決定するという事で、役員会に一任する形で可決されました。また、11月23日(祝)本学東京キャンパスにおいて、新潟医療福祉大学同窓会首都圏支部設立総会を行いました。卒業後に首都圏で活躍する会員からもお集まり頂き、支部長は社会福祉学科1期生の原隆祥さんに委嘱いたしました。新潟を拠点とする同窓会本部だけではなく全国各地で活躍する会員との密な情報交流や親

睦を図ることが難しいため、今後設立を予定しております他府県支部や、学科同窓会などの先駆けといたしまして、東京にて同窓会首都圏支部を設立する運びとなりました。活動内容としては、定例総会やSNS(Social Networking Service)を用いた会員との交流を予定しております。本会では先に挙げました総会が毎年2回開催されます。役員一同、会員の皆様を心からお待ちしております。ぜひお越しく下さい。



新潟医療福祉大学同窓会 会長 齊藤公二

受験生のみなさんへ

イベント案内

随時HPを更新していきます。詳しくはこちらをご覧ください。

■キャンパスツアー

第1回/3月29日(土)※ 第2回/4月26日(土) 第3回/6月21日(土)

大学概要説明、入試概要説明はもちろん、施設見学、個別相談コーナー等充実のプログラムを用意しています。また、学外から講師を招いて看護・医療・福祉・健康系総合ガイダンスや小論文対策講座など各回毎に違った趣向を凝らしたプログラムを計画していきます。

※3/29日のキャンパスツアーは当初3/22日の予定から日程変更となりました。



ホームページ案内

(PC) <http://www.nuhw.ac.jp/>

(携帯電話) <http://www.nuhw.jp/m/>

新潟医療福祉大学の情報が満載です。新着情報やイベント情報などを随時更新していきます。ぜひご覧ください。資料請求、イベント参加申込み、メールマガジン登録等はこちらからどうぞ!



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地 TEL025-257-4455(代) FAX025-257-4456

URL <http://www.nuhw.ac.jp/> 携帯サイト <http://www.nuhw.jp/m/>

【入試事務局】TEL025-257-4459 E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp

